

したといふことを書いたものに出遇ふことが少くない、例へば元の初めの世祖が儒學を尊重したといふことは普通に傳へられて居ることである、併ながらそれは何處まで尊崇したものやら、或は表面だけであつたかも知れぬと私は考へる、支那を治めて行くことでありますから治まるやうにして治めなければならぬ、それに付ては支那の文明を否定するやうなことでは到底治めることは出来ない。世祖に仕へた有名な儒者の許衡といふ人がある、この人が世祖に奉つた五事の奏上といふものがある、それを見ますと、萬事漢法に従へといふことが繰り返し繰り返し書いてある、若し支那の法に従はなければ支那の土地を治めることは出来ないといふてゐる、さうして世祖もそれに隨ふといふ方針を執つて居る、若しさういふ方法を執らないで、當時蒙古の人達が主張したやうな亂暴な方針、例へば漢人は何等蒙古の爲には役に立たぬから、支那の土地は牧場にしてしまへといふやうな説、さうして事實一部分の土地は牧場にされたこともあつたのであるが、そんな方針を執つては到底漢地を治める事は出来ない。世祖がかかる説には隨はないで、漢法に隨つて行く方針を執つたのは賢明なやり方である、さうして儒學をも尊び、儒者をも重んじたとして知られて居る、併ながらこれは一部分若くは大部分支那を治める政策の上から來た所ではないかといふ風に考へられる。若し眞實支那の文明を尊崇し、支那の文明を取入るゝ覺悟を持つて居つた人であるならば清朝の康熙、乾隆の諸帝に於けるが如くでないにしても、今少しく積極的にこれを尊崇する態度が認められなければならぬ。世祖といふ天子は支那の書物は無論讀めず、その内容を知る場合にはすべて翻譯に待つたものである。世祖のみならず、元の天子で漢文を讀めた者は一人もない、支那に君臨して居りながら漢字で書いた所の書物は讀めなかつた、天子のみならず宰相でも漢文の讀めたといふ人は多くはなかつた、その事は清朝の趙翼といふ學者